シリーズ「共に絆を深める」④キリストと心を一つにして　　ヨハネ 17:20-23

今年、蛍池聖書教会は「キリストにあるきずなと一致」のテーマのもと、教会生活を共に歩んでまいりました。またここしばらく共に絆を深めるというシリーズで絆を深めるために必要なことを学んでいます。今日はこのシリーズの最後として私たちが互いの絆を深め、一致してゆくことの意味をみ言葉から学びたいと思います。今日取り上げましたのはヨハネ 17 章の主イエスの弟子たちのためのとりなしの祈りの箇所です。ヨハネ 17 章の祈りから、どのようなことを教えられるでしょうか。

この祈りを読むと主イエスの弟子たちへの深い愛を感じることができます。ヨハネ 13:1 に「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。」とあるように、主イエスは、弟子たちを愛し通されました。主は、ご自分がこれから受けようとしている苦しみのことよりも、世を去った後の弟子たちのことを心配し、そのために心を込めて祈ってくださったのです。

この後、「我こそは主イエスの一番弟子だ。主イエスのためなら死ぬことも厭わない」と自負していたペテロは、結局、まだ何の危害も被っていないのに、人々を恐れて「イエスなどと言う人は知らない。」と言って、主を否定してしまいました。しかし、そんなペテロも、その失敗から立ち直って、大胆にイエスの復活を宣べ伝えるようになります。ではペテロを立ち直らせたのは、何だったのでしょうか。それは主イエスの祈りです。主イエスは、ペテロが主を否定するだろうと予告しましたが、その時、「しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」（ルカ 22:32）と言ってくださっていました。もちろん、ペテロも涙の祈り、悔い改めの祈りをしたことでしょうが、主イエスがペテロのために祈ってくださった祈りによって、ペテロは立ち直ることができたのです。弟子たちは、主イエスが最も大きな苦しみに直面している時に、イエスと共に祈る、イエスのために祈ることをしなかったのに、イエスは弟子たちのために祈り続けてくださっていたのです。イエスの祈り、弟子たちのための祈りが弟子たちを支えたのです。同じ主が、今も、私たちのために天の御座において祈っていてくださいます。クリスチャンと言えども、ちょっとした人の言葉や態度で心が乱れ、自己正当化してしまう弱い私達です。しかし主イエスが祈ってくださっている、そのことに励まされて、私たちもまた、もっと祈るものとなりたいと思います。

さて主は、弟子たちのためにいくつかのことを祈ってくださいましたが、今朝の箇所では弟子たちが一つとなるようにと祈ってくださっています。「一つになる。」それは、クリスチャンの一致を表わしていますが、その一致とは、どんな一致でしょうか。「一致する」「団結する」といっても、いろんな一致のしかた、団結の形があります。私もそうでしたが、一致、団結というと労働運動や組合運動を連想するかもしれません。労働団体が大きな組織を作って、給料や待遇の改善を経営者側に要求するのですが、そこでの一致、団結は利害関係に基づいたもので、人と人との深いつながりによるものではありません。

しかし、イエスが、弟子たちのために祈ってくださった一致は、外側からの強制による一致や利害関係による一致ではありません。神が、クリスチャンに与えてくださった一致は、もっと霊的なもの、信仰的なものです。主イエスは、21 節で「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにいるように、彼らがみな一つとなるためです。」と言い、22 節で、「わたしたちが一つであるように、彼らも一つであるためです。」と言っておられます。クリスチャンの一致は、父なる神と主イエスの間にある一致と同じであるというのです。では、父なる神と主イエスの間にある一致とはどんな一致でしょうか。それは、まずなによりも、愛の一致でした。父は御子を愛し、御子は父を愛しておられます。次にそれは、こ

ころざしの一致でした。父はこの世を愛し、この世を救おうとされました。御子は父なる神のおこころを実行するために、この世に来られ、その命さえも投げ出されたのです。クリスチャンの一致も、父と御子の間にある一致と同じで、神を愛する愛、互いに愛し合う愛、人々を愛する愛によって結びあわされ、神とキリストから託された使命を果たすためにこころざしを一つにしているのです。使徒パウロはピリピの手紙で「私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。」（ピリピ 2:2）と言っていますが、キリストによって与えられた愛とこころざしにおいて一致するのがクリスチャンの一致というものです。私の感覚に合うから一致できる、合わないから一致できないというのではないのです。

・ではどうしたら一致を保つことが出来るのでしょうか？

クリスチャンの一致は、人間の努力で作り出すものではなく、それは、すでに神によって与えられているものです。父と父から生まれた御子の間に一致があるように、ひとりの父なる神から生まれた神の子たちの間には、おのずと一致があるのです。聖書は「一致を生み出せ。」とは教えていません。むしろ、「一致を保ちなさい。」と教えています。一致は、すでに与えられているのですが、一致を壊そうとする力も働いています。ですから、どうしたら一致できるかとあれこれ考えるよりも一致を壊そうとするものを斥けて、一致を守る努力が私たちには必要です。主イエスは、弟子たちが、一致を壊そうとするものに直面することをご存知で、クリスチャンの一致のために祈ってくださったのです。

では、何がクリスチャンの一致を壊すのでしょうか。それは外からやってくるのでしょうか。それとも内側から起こって来るのでしょうか。初代教会は外側からは、迫害によって苦しめられ、内側からは間違った教えに悩まされました。初代教会への迫害は、最初はユダヤ人から、次にはローマ帝国からのもので、それは理不尽で、すさまじいものでした。しかし、クリスチャンは迫害されればされるほど、一致し、団結していきました。教会の歴史を見ると外からの迫害は、クリスチャンの一致を損ないませんでした。一致を損なったのは、内側から起こった、誤った教えでした。ユダヤ主義や、ギリシャ哲学のひとつであるグノーシス主義が教会の中に入ってきて、クリスチャンの一致を壊していきました。それらは、神の言葉からキリストの十字架を取り除いたり、哲学や、民間の言い伝えなどを付け加えようとするものでした。そして、誤った教えが入って来たところには、必ずと言っていいほど、人間的な誇りや競争心、偏見や狭い心も入ってきて、それらが一致を妨げたのです。残念ながら、初代教会を悩ませた誤った教えは、姿を変えて現代にいたるまで続いており、今も教会の一致を損なおうとしています。自分勝手な人生哲学であったり、自分のプライドや頑なな心がそれにあたるかもしれません。ですから私たちは目を覚まして祈っていなければなりません。

また主イエスは「わたしは、ただこの人々のためだけでなく、彼らのことばによってわたしを信じる人々のためにもお願いします。」（20 節）と祈られました。これは、最初の弟子から次の弟子、次の弟子からその次の次の弟子へと、神のことばが伝えられていっても、神のことばが決して曲げられず、薄められずに、すべての世代のクリスチャンが、真理において一致していくようにとの祈りでもありました。初代教会や、宗教改革時代の教会と、21 世紀の教会ではまったく環境が違います。しかし、21 世紀に生きる私たちも、初代教会の歴史を学び、宗教改革の出来事を聞く時、不思議に心が燃やされ、初代のクリスチャンや宗教改革を戦った人々と、おのずと同じ思いが与えられるのです。時代が変わっても変わらない一つの真理を守り、一つの信仰に結びあわされ、真理と信仰のための一つの戦いを戦っていく、そんな

一致を私たちは守り抜いていきたいものです。
最後に私たちが一致する目的について考えたいと思います。

主は、私たちのために一致を祈ってくださいました。それは、この世の表面的な一致ではなく、愛とこころざしにおける一致でした。この一致を与えられたクリスチャンは、それを真理と信仰によって守っていくよう、求められています。キリストは、クリスチャンがこの一致を保つことができるようにと、祈ってくださいましたが、クリスチャンが一致を保つのは、いったい何のためでしょうか。

主イエスは、このことについてこう言っておられます。「そのことによって、あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるためなのです。」（21 節）「それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。」（23 節）主イエスのおこころの中には、ご自分の弟子たちへの深い思いやりがありました。教会への愛がありました。しかし、それだけではなく、弟子たちを苦しめ、教会を迫害するであろう「この世」に対する愛の思いもありました。今は神を知らず、救い主を受け入れず、クリスチャンたちを苦しめている世の人々も、やがて、イエスがキリストであることを知るようにと、主は願い、そうした人々のために祈っておられるのです。主は、なんと大きな愛をもっておられたことでしょうか。キリストのこのこころを知る者は、自分たちに与えられたキリストとのまじわり、互いの一致を喜び楽しむだけでなく、より多くの人々がこの一致の中に入って来るようにとの祈りに導かれていきます。

主は、この世の罪深さをご存知でした。主は、クリスチャンに、この世から聖別されなさいと言われ、神は、クリスチャンに「世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。」（ヨハネ第一 2:15）と命じておられますが、同時に、神は「そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」（ヨハネ 3:16）のです。この世は、キリストをしりぞけ、キリストを十字架の死に追いやり、キリストに従う者たちを苦しめました。しかし、神はまったく世をしりぞけることをせず「すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられ」（テモテ第一 2:4）ます。今は、神に敵対していても、キリストに無関心であっても、やがてキリストを信じるようになる人々のために、キリストは祈り、そのために、クリスチャンが一つになって、キリストをあかしするよう求めておられます。私たちも、私たちの、配偶者や子どもたち、また、まわりの人々を、「やがてキリストを信じるようになる人々」として愛し、その救いのために一致を保つ必要があるのです。ですから福音宣教のためには私たちは皆、同労者なのです。

よく自分の存在意義、自分は何のために存在しているのか？そう言った声を時々耳にします。孤独だ。寂しい。何をしたら良いか分からない。このような質問は誰でも持つものです。かつて「自分探しの旅」ということばも流行りました。しかし聖書はもし自分の人生の目的、意義を知りたいと思ったら、個人主義と言う自分自身を捨てなければならないと教えています。信仰における逆説（パラドックス）です。今日の箇所はまさに神と心を一つにし、他のクリスチャンと思いを一つにする安全な共同体の中でこそ、個人個人の真価を発揮することが出来ることを教えています。与えられた賜物がそうです。何のために神様は賜物を与えられたのでしょうか？　あなたが他の人が持っていない賜物を持っていることによってあなたが注目されるためでしょうか？　そうではありません。キリストのからだなる教会のため、他の兄弟姉妹のために用いられるようにです。神を愛し、主にある兄弟姉妹を愛し、与えられた賜物が豊かに用いられているところでキリストにある絆と一致が保たれます。願わくは私達の教会がキリストにある絆と一致をもって主を証しし、福音によって救いに導かれる人が起こされるように祈り合って歩んでまいりましょう。